

●最優秀賞

「震災体験の対象化」による被災児への《心のケア》の試み

宮城県石巻市立雄勝小学校 とくみずひろし 徳水博志



1 はじめに

2011年3月11日の東日本大震災の巨大津波によって、南三陸海岸に位置する石巻市雄勝町は中心部の90%が壊滅した。宮城県一の生産量を誇ったホタテの養殖業は壊滅し、加工場や商店街も消滅した。そのために震災前4300人の町は人口流出によって、1000人までに減少してしまった。勤務校の雄勝小学校も20mの津波によって全壊となったために、15km離れた隣町のK中学校に間借りして学校再開となった。しかし、児童全員が自宅を流失したために転校が相次ぎ、震災前108名の在籍児童数は震災1年目にして41名までに減少してしまった。このまま人口流出が続けば雄勝町の存亡にかかわると危機感をもち、2011年9月から学校全体で取り組んだ教育が、《復興教育》である。その《復興教育》の柱は、《地域復興を学ぶ総合学習》である。

震災1年目の6年生は、地域の復興活動に学びながら住民にアンケートを実施して、独自の復興プランを立案した。そして、2012年3月、住民組織「雄勝地区震災復興まちづくり協議会」で意見表明して、大人たちを大いに感動させた。その結果、子どもたちの復興プランは、その一部が石巻市役所雄勝総合支所の復興計画案『マスタープラン』（2012年8月）に採用されるという成果を生み出すことができた。こうして、

震災1年目は地域復興と学力形成を結び付けたことで、学習意欲を高め、自己有用感を育てることができた。

さて、震災2年目の2012年度の《復興教育》は、被災児の心の復興に本格的に取り組む必要性があった。本稿では、震災2年目の被災児に対する《心のケア》の実践研究を報告するものである。

2 子どもの実態

(1) 震災2年目から起きた「新たな荒れ」

震災2年目、私は5年生8名を担当した。震災直後に11名が転校し、残った児童数8名の学級である。震災2年目の5年生の特徴は、学習意欲の異常な低下であった。初めから理解できないと諦めている子どもが多く、新しい課題に挑戦する気力が乏しいのである。しかし、問題は学習意欲だけではなかった。トラブルや暴力が絶えず、些細なことでイラついて、「消えろ！ 死ね！ 殺すぞ！」と吐き捨てる子どもが目立っていた。さらに教師へのタメ口も時々見られた。さすがに担任の私には口をつぐんだが、彼らの乱暴な言動を注意する若い教師や支援員を平気で呼び捨てにした。4月に新しく転入した教員は本校の高学年の態度にショックを受けたようで、「この子らと一日過ごす人間的な感覚がマヒするようで、ひどく傷つく」という声を発した。教師としてのプライドをひどく傷

つけられたようだった。そういう震災がらみの「新たな荒れ」が5年生でも始まっていた。

(2) 荒れの要因

荒れを生み出す要因は大きく二つが考えられる。一つは震災が与えた直接的な影響である喪失感や心の傷である。二つ目は間接的な影響と言えるもので、震災後の急激な生活環境の変化によるストレスである。半年間の避難所暮らし、壁の薄い仮設住宅の住環境、親の就労不安、間借り教室という学校の教育環境、子ども主体の教育活動の削減、学校側が与える学力向上策と子どもの学びの要求とのズレなどが挙げられる。特に5年生の喪失感やストレスは深刻であった。とりわけ一人親の家庭の子は一層深刻だった。経済的な困難さに加えて、仮設住宅に同居する親や祖父母が入退院を繰り返していたのである。この状況下では学習意欲や前を向く気力が失せていくのは当然である。大人でさえも生きる気力が奪われるような、困難な状況が被災地では続いている。

しかし、子どもたちをこのまま放置するわけにはいかない。教育行政からは「時間が経てば子どもの心は回復する」という話を聞いたが、目の前の子どもたちはすでに自然治癒の限界値を超えているように見えた。今のままだと震災体験はただのマイナス体験である。千年に一度の体験から何かを学び、プラスに転じることが必要だと考えるようになった。そして、心のケアを目指す新たな教育実践の必要性を痛感するようになった。

3 「震災体験の対象化」による《心のケア》の試み

(1) 自己の被災体験から学ぶ

2学期初めに転校先からA子が戻ってきた。転校先で不登校に陥り、再び雄勝小学校へ戻ってきた子どもである。震災前は私の自宅の近所に住み、幼い頃からよく知っている子どもだ。登校時に祖母の車から泣きながら降りてくるA

子の姿は痛ましい限りである。そういえば、震災当日から3日間は家族の安否が分からずに、避難所で泣き続けていた子どもでもある。「よし！この子のためにも新たな教育実践を立ち上げよう」と覚悟を決めた。その新たな教育実践とは子どもの苦悩そのものを教材化することではないか、子どもに寄り添って心の不安や叫びを聞き取り、受け止め、表現させ、乗り越えさせることではないのかと考えた。しかし、実践の前例はどこにもなかった。阪神淡路大震災でも実践記録がない。手探りで行うしかなかった。

ところが、意外にもその手がかりは私自身の被災体験の中にあっただのである。自宅を流され、データなど過去の教育実践資料の一切を奪われた喪失感。瓦礫をかき分けながら妻の母親の遺体を探し回った絶望感。自分の過去と愛する家族を一瞬で奪われてしまった衝撃。悲しみとも怒りともつかない慟哭の正体と向き合い、徹底的に言語化した自己の内面の対象化。この震災体験の対象化の作業を経て、前を向く気力が湧いてきたという自分自身の回復体験の中こそ、実践の手がかりがあったのである。そこで、この新たな教育実践を《震災体験の対象化》と名付けることにした。

(2) 総合学習「震災体験を記録しよう」

2学期の初めに、総合学習のテーマ『震災体験を記録しよう』を立ち上げた。そのねらいとは、子どもたち自身が震災体験と向き合い、震災体験を対象化することを通して、自分の心の中に震災を乗り越えようとする意思を育むことである。実践領域は総合的な学習の時間と教科及び行事、実践方法は《震災体験の対象化》、実践の目的は被災児の心のケアである。実践の構想はもっていたが、活動の構成はその都度手探りであった。一つの実践を終えると、課題が把握でき、次の活動の構成が見えてくるというような、その繰り返しであった。

- ①9月；震災体験の俳句と作文（国語科）、
- ②10月；震災体験の朗読劇（行事・学習発表会）、

③12月；震災体験の時系列による絵本作（総合）、④1月；ジオラマ制作（総合・図工科）、⑤2月；木版画「希望の船」の共同制作（総合）。実践を終えて振り返ると、結果として以上のような活動構成になっていた。

○ 震災体験の俳句と作文（国語科）

9月の「震災体験の俳句と作文」では、導入部で朝日新聞記者の小野智美氏が書いた著書『女川一中生の句・あの日から』（2012年7月羽鳥書店）の中から俳句を紹介した。あの大川小学校で次女を亡くされたS先生が女川第一中学校で行った国語科の授業実践である。その中学生の俳句を慎重に紹介して感想を聞いた結果、子どもたちは震災を語ることに特に抵抗感を見せることはなかった。女川一中生の俳句が家族への愛や故郷への愛に触れたものが多かったからだと思われる。そこで、君たちも震災体験を俳句（季語なしの五七五調）にしてみようと提案した。子どもたちが作った俳句には、女川一中生に触発されたのか家族のことがよく出てきた。

この俳句作りに安堵感と手ごたえを感じて、いよいよ震災体験を作文に書くことを提案した。一年半ぶりに震災の記憶と向き合うことは辛かっただろうが、学級の仲間がお互いに聞き役になってくれた。辛さを分かり合える仲間の支えが震災体験と向き合う辛さを軽くしてくれたようだった。一人では辛い、みんなと一緒に書ける。子どもたちは記憶を確かめ合い、語り合いながら震災の記憶を想起して書いた。すると、作文には教師が知らなかった事実がたくさん書かれていて、私たち教師集団は強い衝撃を受けることとなった。

自宅に忘れた犬を助けに帰り、津波に追いかけて九死に一生を得た子、高台から故郷の街並みが流される様子を見て恐怖を感じた子、巨大地震の揺れに難を逃れた後に聞こえてきた、大津波警報のサイレンに「次は死ぬんだ」と死を恐れた子、親と離れ離れになり親の死を覚悟

・なによりも 家族が一番 大切だ
 ・生きていて すごくよかった 本当に
 ・家族がね 大切にしている人は 家族だね
 ・ひなんじよで えがおを見た うれしいな
 ・雄勝小 あの日経験したこと わすれない
 ・あの人に 言えばよかった ありがとう

した子など、その震災体験は想像以上に過酷で辛い内容であった。一方で家族が一番大切と再認識したこと、避難所で触れた人々の優しさ、みんなのために避難所で働くリーダー役の人への尊敬の念など、人間を信頼して肯定する内容も書かれていた。

その作文は学級で読み合っただけでなく保護者にも読んでもらい、我が子へ手紙を書いてもらった。こうして震災作文を通して、親子がつながり直す機会もつくり出すことができた。作文を書いた後に、N子が書いた詩『わたしはわすれない』を紹介したい（次ページ）。自分の震災体験を対象化し、意味付けた詩からは、震災を忘れないという固い決意が伝わってくる。

○ 震災体験の朗読劇（行事・学習発表会）

10月の学習発表会では、故郷の復興を祈る5・6年生合同の『朗読劇・ふるさと復興』を発表した。朗読劇の台本は、子どもの震災体験を語る作文の朗読とJR東京駅舎の復元物語を織りまぜて創作した。台本には、津波で流されずに瓦礫の中から見つかった雄勝石のスレート材が、地元の職人さんの手作業によって復元中のJR東京駅舎の屋根材に使われたこと、丸の内駅舎の地下街には雄勝町の全小中学生が描いた富士山の雄勝石絵が展示され、雄勝復興を全国に発信したことも盛り込んだ。

この朗読劇で子どもたちが語った作文には、震災から受けた傷をえぐり出すような悲惨な光

わたしはわすれない

五年 N子

わたしはわすれない
地鳴りがしておびえ からだがふるえて
しゃがみこんだことをわたしはわすれない
ガソリンスタンドのおじさんが
走ってきて

助けてくれたことを

わたしはわすれない

豆腐屋のおじちゃんか
みんなを避難させて

自分だけは津波に流されたことを

わたしはわすれない

豆腐屋のおじちゃんか
ふいていたラッパの音を

わたしはわすれない

誕生日にお母さんにもらった
大切なネックレスを
流されたことを

わたしはわすれない

家族 友達 わたしが
写っていた思い出の写真を
流されたことをわたしはわすれない
自衛隊の車に乗って
こわれた北上川の横を走り

雄勝から出てきたことを

わたしはわすれない
避難所であっただいた
スープのあったかさと

おにぎりの味を

わたしはわすれない

飯野川中の避難所で遊んでくれた
お姉さんたちの
笑顔とあたたかさを

わたしはわすれない

こわされた家を
流された命を助けられた恩を
人のあたたかさをわたしはわすれない
大震災の記憶の
すべてを

景も含まれていた。6年生のB子は、「私は亡くなった人の遺体を見てしまいました。目玉が飛び出していて少し怖かったけど、とてもかわいそうだと思います」と語った。5年生のRは津波に追いかけて難を逃れた後に、母親との電話の会話を思い出して次のように語った。「津波の後に一瞬思い出したのが、お母さんの『うん、分かった』という言葉でした。あの『うん、分かった』が最後の言葉となったのかなあと思いました」と、母親の死を覚悟した思いを語ったのである。震災の記憶と向き合うことは、子どもにとっても過酷なことだったと思う。

私の震災の記憶を少し語るとすれば、学校に残っていた子どもたち40名を裏山に避難させて助けることができたのは、ほんの偶然に過ぎないという事実と直面する。子どもの引き渡しがあったために、学校側の判断はまだ裏山への避難を実行していなかった。ところが、我が子を引き取りに来た保護者のSさんから、「いつまで校庭にいるの！ 早く裏山に避難させて！」という強い諫言をもらって、ようやく裏山に避難したのである。それからしばらく経つと、海

がみるみる膨れ上がり、防潮堤からあふれ出した津波が巨大な壁のように押し寄せ、体育館を押しつぶし、校舎屋上まで丸呑みにした。もしあの時、Sさんの強い諫言がなかったなら、全員の命はなかったはずだ。助かったのはほんの偶然に過ぎない。そう考えると、心の裏側がざわつき、どうしようもない不安に襲われる。震災の記憶と向かい合うことはこんなにも辛い。まして子どもにとっては、過酷なことだったに違いない。

本実践に対して、保護者からクレームは聞こえてこなかったが、会場からはすすり泣きの声が響いた。朗読劇は観客にかなりの衝撃を与えたようだ。一方、発信者である子どもたちの反応は次のとおりである。朗読劇の終了後、5年生のM男は新聞のインタビューにこう答えている。「震災とか、石絵のこととか、俺たちにもできることがあるらだて、全国に伝えたかった」。同じく5年生のN子は、「津波を思い出すのは怖いけど、震災を忘れるのはもっと怖い。当時の大変さや命の大切さを伝えていかなきゃいけないのです」と答えている。子どもたちが

震災の記憶と向き合い、震災を乗り越えようとする意思が育ってきていることを確認できて、朗読劇を企画した者として、ほっと胸をなで下ろしたというところである。

しかし、このような過酷な体験を扱う実践に対しては、子どもの心の傷口を広げるのではないかと危惧する声があるのも確かである。私自身も悩みながらの実践だった。今回の朗読劇が果たして教育実践として妥当だったかどうか、震災体験を対象化する教育実践はどうあればいいのかという問題意識はずっと抱えたままであった。

そんな時に出会ったのが、10月14日付の朝日新聞の記事『津波の記憶向き合い克服を』に掲載された、東北国際クリニック心療内科の桑山紀彦医師である。桑山医師はNPO法人『地球のステージ』を立ち上げて、名取市閑上地区で被災した閑上小・中学生の心のケアに取り組んでいた。—「子どもが辛い経験をもっと話せるようになることが必要です。そのためには学

校が語り合える場を作ってほしい」— この記事を読んで、これだ！ と思い立ち、早速桑山医師に会いに名取市まで行った。そして、被災児の心をケアする方法である「心理社会的ケアワークショップ」について教えていただくこととなった。

○ 「心理社会的ケアワークショップ」とは

「心理社会的ケアワークショップ」とは、桑山医師がノルウェーのオスロ大学に留学して学んだケアプログラムであり、戦争や災害から心に傷を受けた子どもたちのケアを目的とするものである。このケアプログラムのねらいは、次の二つである。①心的外傷後ストレス障害・PTSDの予防(マイナスからゼロへ)。②被害を乗り越え、さらなる自信の構築(ゼロからプラスへ)。

桑山医師によると、震災1年目は心的外傷後ストレス障害(PTSD)の予防的ケアが必要だという。心理的内面を表現しやすい平面的表現のワークショップから始め、次に粘土やジオラマなどの立体的表現へ発展させていくという。この表現活動を通して、震災の記憶と向き合い、心に抱える感情をはき出し、受け止めてもらえ、抜け落ちた記憶を時系列で整理することで、心的外傷後ストレス障害の予防ができるというものである。名取市閑上地区では桑山医師の指導の下で、大学生たちが被災児童や住民たちに対して、「ジオラマ制作」による心のケアに取り組んでいた。

桑山医師は医学的な知見から、心のケアを「症状中等度～重症→治療」、「症状軽度→カウンセリング」、「病状なし→心理社会的ケアワークショップ」の三段階に分けていた。前者二つは医療行為であり、医師にしかできないケアであるが、「心理社会的ケアワークショップ」は子どもといつも一緒にいる学校の教師や保育士、看護師などが適任であると教えていただいた。桑山医師の説明をさらに聞いていると、被災児の心のケアプログラムである「心理社会的ケアワークショップ」を教育の側から受け取り直す

津波の記憶向き合い克服を

東北国際クリニック心療内科の桑山紀彦さん。震災1年目を迎える被災地の子供たちに、心のケアを届けるべく、名取市閑上地区でワークショップを開催している。

震災1年目を迎える被災地の子供たちに、心のケアを届けるべく、名取市閑上地区でワークショップを開催している。桑山医師は、震災1年目を迎える被災地の子供たちに、心のケアを届けるべく、名取市閑上地区でワークショップを開催している。

桑山紀彦さん
心療内科の桑山紀彦さん

津波の記憶向き合い克服を

経験語る場、学校に

インタビュー

ならば、私が実践していた《震災体験の対象化》とほぼ同義であると理解できた。そこで桑山医師からアドバイスをもらいながら5年生の子どもたちに対して、「心理社会的ケアワークショップ」の一つである「ジオラマ作り」を行うことにした。

○ ジオラマ制作（総合・図工科）

桑山医師に学んで取り組んだ実践は、2013年1月に実施した。内容は、①「震災前の自宅周辺のジオラマ制作」、②「雄勝に居た頃の“私の宝物”」の版画制作、③「住んでみたい新しい街のジオラマ制作」である。時数は総合的な学習と図工科で確保した。

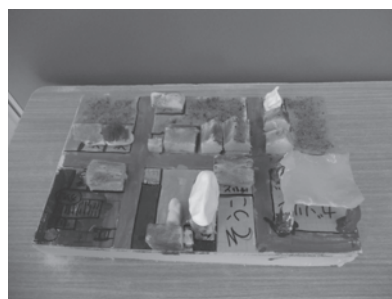
この実践によって、心のケアが特に促進できたのはK子である。津波で雄勝の町が破壊される様子を高台から見ていたK子は、津波の恐怖が頭をよぎり、震災後は雄勝町に行くことを避けていた子どもでもある。母親によると、K子は震災1年目の4年生時は震災を題材にした作文を嫌がっていたそうである。5年生の9月に書いた震災体験作文からようやく震災と向き合うようになったのである。作文の題名は「一年半がたった今」であったが、津波の恐怖や喪失感と向き合い、辛さを抱えながら書いた作文であった。桑山医師のアドバイスに従ってK子を観察すると、明らかに心的外傷後ストレス障害（PTSD）の「回避」に似たような症状が見られた。桑山医師に相談すると、わざわざ5年生教室に足を運んでくれて、K子のケアに関する具体的なアドバイスをいただくことができた。

そのK子が、①「震災前の自宅周辺のジオラマ制作」（作品1）では、実に楽しそうに活動した。友達と楽しく遊んだこと、家族と一緒に夏祭りの思い出などを級友と語り合っている姿は笑顔にあふれていた。“雄勝と聞けば津波の恐怖”という縛りから解放されたように声が弾んでいた。

このケアを基にして、次のステップ②「雄勝に居た頃の“私の宝物”」の版画制作に入った。

発想段階では雄勝の思い出を想起させた。他の子に比べてK子が想起した思い出は少なかったが、津波の恐怖と向き合いながら、少しずつ過去の記憶を取り戻しているようだった。構想段階の下絵では、初めは雄勝に建っていた自宅を描いていたが、途中で下絵を変更して家族4人を版画（作品2）に表現した。K子の家族は両親と二つ年上の姉と4人家族で、いつも一緒に行動する仲のいい家族である。版画制作のプロセスで、家族が自分にとって最も大切な宝物であると気づき、家族愛が「自分自身の人生の土台」とであると再認識できたのである。

続いて、③「住んでみたい新しい町のジオラマ制作」を行った。K子は、自分が住みたい新しい家と街（作品3）を作った。自分の家の隣



作品1



作品2



作品3

にはプールや温泉のほかにゲーム学校と公園もあり、密度の濃い表現活動を実に楽しそうに行った。

このジオラマ制作の教育的意味を考えてみよう。桑山医師によると（*注1）、ジオラマ制作では「自分の街がどうだったか再確認し、そこに確かに自分が生まれてきた証を再確認することで、『自分には土台がある』という気持ちを持ち、生きてきた『時』を取り戻すことができる」のだと言う。さらに、ジオラマ制作の過程で、「自分が大切にしていたもの、何を希望し、何を願っていたかという『感情』を再確認し、「情緒的な部分を表現することで、突然失われたものに対する不安感や喪失感をうめていく」ことができるのだと言う。そして、「あえて街の復元に取り組むことで、自分が生きてきた『時』と『感情』という自分の『土台』を取り戻し、それにより不安や喪失感を払いのけることができる。そして、その先に『自分はどんな街に住みたいのか』という『意志』をもつことができ、たとえ前の街に自分の家が再建できな

くても『自分の人生はどこでもいつでも復活できる』という意志を全身で感じて、『つくり出すことへの意欲』を獲得できる」のだと言う。

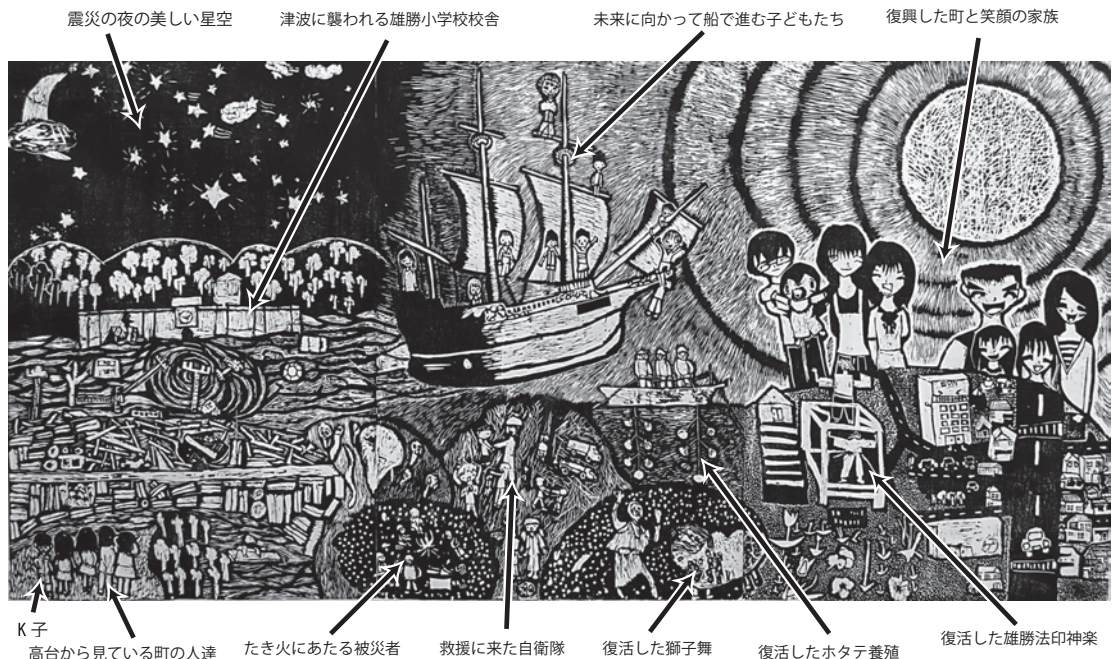
以上が、桑山医師が説明するジオラマ制作の意義であるが、本実践にも十分に当てはまる。活動を終えたK子は、「津波で壊れた雄勝のことを思い出すのは嫌だったが、楽しい思い出や家族とのことを思い出すと、気持ちが楽になる」と感想を述べている。《震災体験を対象化》するジオラマ制作と版画制作が、K子には特に有効に働いたと言える。

○ 木版画「希望の船」の共同制作（総合）

2013年2月、5年生最後の実践を行った。総合学習テーマ「震災体験を記録しよう」のまとめとして、木版画「希望の船」の共同制作を行った。この作品をまず解説したい。

画面左側は巨大津波で雄勝の町が破壊される場面である。小学校校舎に津波が押し寄せて渦を巻いている。その惨状を手前の山から見ている住民の中に一人だけ目を背けている子どもが

共同制作「希望の船」2012年度 石巻市立雄勝小学校5年生制作 90×180



いる。それがK子である。画面右側は復興した未来の町と笑顔の家族である。画面の下側は2年間の雄勝町復興の歩みである。避難所での焚き火、復活した獅子舞、再開されたホタテ養殖、雄勝法印神楽の順で描いている。画面中央には船に乗って未来に進む自分たちの姿がある。津波の場面を描いた子は、「回避」のような症状が見られたK子である。津波を描き、津波の恐怖を対象化したことによって、恐怖の支配から解放されたと言えよう。

最後に、この共同版画「希望の船」の実践が子どもにとってどのような意味をもったのか、子どもが書いた感想文を手がかりに述べてみたい。

【感想文1】はN子である。N子は9月に「わたしはわすれない」という詩を書いて、すでに震災体験を対象化して意味付けた子どもである。この感想文でもN子は、震災の記憶を版画の白黒の形象にして心に刻み付け、震災を後世に語り継いでいく固い決意と、前を向き力強く歩む

決意を述べている。

【感想文2】はR男である。この感想文からはR男の苦悩や葛藤がよく伝わってくる。版画制作を通して自分を対象化し、自分の立ち位置を確認できたのだろう。まだ前を向く心境ではないが、それでも一歩ずつ歩みたいという健気な思いが伝わってくる。このように、版画表現という《震災体験の対象化》を介して、子どもたちは辛い記憶と向き合い、受容し、心を整理し、意味付けることで前を向くことができるのである。

(3) まとめ

俳句と作文、朗読劇、ジオラマ制作、共同版画制作を活用した《震災体験の対象化》という心のケア方法について実践例を入れて述べてきた。本実践で用いた方法が有効に働いた子どもがいる反面、そうでない子どもも存在する。その理由は、親の生活再建の程度が子どもの意識に反映するためだと考えられる。

【感想文1】 N子

私は、あの三・一一の暗い事と明るい未来の事を、そして船を彫りました。私達が体験した三・一一からにげずに前へ進んで行くという思いで、この共同制作の版画にいどみました。後世に伝えて行かなくてはならないこの事を版画にして何年後、何十年後と時がたっても、この版画を見て、思い出してもらうことや、後世に伝えていくことができるのではないのでしょうか。そして、私達もわすれかけている時に版画を見て、その震災を思い出せると思います。私はこの共同制作『希望の船』を制作してよかったなあと思います。私はもう転校しますが、転校した学校でできた友達にも、この『希望の船』のことを教えようと思います。私の大切な思い出です。

【感想文2】 R男

この『希望の船』は、最初はいやだったけど、雄勝のことを思い出してやってみたら、うまくやれました。時にはふざけたりあきたりしたけど、でも三月一九日に彫りができてよかったです。また機会があったら、やりたくないけどやりたいです。これからもこの『希望の船』が太陽に向かって進むように、前へ、前へ、ちょっとずつでもいいから、進んでいけたらいいなあと思います。雄勝にいたころの思い出や友達、雄勝の伝統、ふるさと、津波にのみこまれた人、雄勝小学校、家族、宝物がすべて流されたけど、これからも死んだ人の代わりに、生き続けたいです。

例えば【感想文1】のN子は前を向き、目標をもって力強く歩み始めている。その背景には自宅の再建がある。N子の家庭は石巻市街地に自宅を自力再建した。それに伴って6年生進級時に転校していった。それに対して、二人目の【感想文2】のR男の家は仮設住宅暮らしである。このように、子どもの意識は親の生活再建に大きく影響される。

しかし、子どもが抱く希望が親の経済的な条件に一方的に規定されると思いたくはない。教師の意図的な教育実践によって、主体の条件を育てることは可能である。子ども自身が震災で受けた喪失感や苦悩と向き合い、受容することから出発し、心を整理して前を向くことは可能ではないだろうか。この版画制作でも、初めのころは完成などしないと自信をもてなかった子どもが多かったが、諦めずに取り組んで作品を完成させた結果、思いがけず自信を得た子どもが多数いるのである。教師にできることは限られる。しかし、子どもたちが希望を抱くまで可能な限り挑戦することが教師の仕事ではないだろうか。

4 成果と課題

被災児の《心のケア》を目的に、《震災体験の対象化》という方法論の有効性を検証してきた。実践の結果、被災児の心のケアに一定の成果が見られたと結論付けた。ただし、《震災体験の対象化》という方法論についての心理学や教育学による科学的な裏付けは乏しく、手探りで行ったケアに過ぎない。また、PTSDを予防する「心理社会的ケアワークショップ」の一つである「ジオラマ制作」を授業に導入する場合は、医師の指導の下で計画的に行うとともに、教師側の受容的態度で子どもの語りを聞き取ることも大切である。

最後になったが、今後の学校教育の課題を述べたい。これまで子どもの心のケアは、医師や臨床心理士及びカウンセラー等の専門家の領域だと見られてきた。しかし、子どもに一番長い

時間接するのは学校の教師である。専門家と連携しながら教師が授業の中で子どもの心のケアに取り組むことは、今後の学校教育の課題と言える。

〈参考文献〉

*注1 「ひとりじゃない・ドキュメント震災遺児」NHK出版2012年